

須坂は山々に囲まれ扇状地からなる。須坂の立地は街道の交差点であり、貿易の街として栄えた。蔵の街並みは貿易の倉庫として活用され、その姿は現在へと残されてきた。須坂を代表する街並みはボタモチ石の基礎、大壁造りの外壁、置屋根からなる。これらは伝統的に受け継ぐ職人の技からなる。特にボタモチ石は現代では新たに作るの難しいそうだ。職人の技術あふれる須坂の街を博物館として残しながら、職人と住民との距離を近づける体験型博物館を提案する。設計には、街を形成する素材に注目し、『土・木・石・草・水』を使い再構成する。また、体験型博物館として須坂の街並みを支えるために、より身近に感じる展示の仕掛けとして3つのことを組み込んだ。それは、地盤面を掘り下げて視線の高さへ自然に入りこむようにしたボタモチ石や天井を取り除き、小屋組みを見せる縦方向の空間、屋根面を視線の高さまで連続して下げることである。窓から見える景色には中庭の自然を最大限取り込む。住宅と施設とを明確に分ける大壁造りの土壁は旧来の外気と土蔵内との遮断をプライベート空間設計に落とし込んだ。蔵の街並み・街並みを守る職人・街にくらす住民を考える設計である。